

日本語の多単位情報文(重文・複文)の英語への翻訳に関して

岩垣 守彦

言語研究アソシエーション

E-mail: miwgqui@a.email.ne.jp

あらまし 翻訳というのは「イメージ・概念の塊」(単位情報)の順に提示された異言語の「符牒列」を等価的に適正な母語符牒に変換処理するものであるが、言語には固有性がある。その固有性を克服するために、先人たちの「文法」と「解釈法(異言語を母語の構造で理解する)」を参照しながら、言語情報を「単位情報(一つの動詞と一つ以上の名詞)」と「関係性指標」の組み合わせととらえて、「イメージ・概念の塊」の順に処理する方法とその限界を探る。

キーワード 多単位情報文 日英翻訳 関係性指標 修辭的工夫

On the various ways of translating the Japanese compound and complex sentences into English

Morihiko Iwagaki

Association for Language Research

E-mail: miwgqui@a.email.ne.jp

Abstract Japanese compound and complex sentences can be translated into various patterns of English sentence, such as simple sentences, compound sentences, and complex sentences by the ways of estimating the values of unit-information and the ways of using connectives .

I am going to classify the combinations of unit-information and connectives in Japanese compound and complex sentences, using the examples of Japanese-English translation.

Keywords Compound and complex sentences, Japanese-English translation, unit-information, connectives

1. はじめに

日本語でも英語でも、基本的には、伝えたい情報を聴覚符牒や視覚符牒に変換し、{単位情報(イメージ・概念の塊)}(一つの動詞＋一つ以上の名詞)を[関係性指標]でつなぎながら、順々に提示します。そして、翻訳というのは、異言語の「イメージ・概念」{単位情報}の出現順序を母語の[関係性指標]や「修辭的工夫」を巧みに使って、可能な限り異言語の情報の順序を守りながら、母語の嗜好に合わせて変換することです。たとえば、次のように。

①{「うれしいわ」[と]}{言っ[て]}, ②{彼女は膝頭で彼の膝を押した}。(吉行 淳之介:札幌夫人)

①{“Nice man!”} { she said}, ②{[nudging] his knee with hers}.

①{タザキ氏はホテルのカフェ・テラスでコーヒーを飲み[なが

ら]}②{(恋人のマチコが来る)のを待っていた}。(阿刀田 高:宝くじを買う男)

①{Tazaki was drinking coffee in the terrace cafe of the hotel} ②{[as] he waited for his girlfriend Machiko}.

①{やがて森が切[れ]}, ②{海が見えてきた}。(加賀 乙彦:湿原)

①{Before long there was a break in the forest}, ②{[and] the sea came into view}.

①{黒っぽい荒れ海だ[が]}, ②{水平線のあたりから白い帯が伸び[て]}, ③{川のように蛇行し[つつ]}④間近まで来ていた}。(加賀 乙彦:湿原)

①{It was a dark, stormy sea}, ②{[but] {[with] a band of white that started from near the horizon and stretched, ③{[meandering] like a river}, ④to a point close at hand}.

①{波留子はあらかじめ電話で連絡を受けていた[ので]}, ②{夕食の買物をすま[せ]}, ③{部屋を掃除し[て]}, ④{((布由子の)帰り)を待っていた}. (五木寛之『四季・波留子』)

①{Haruko, {[who] had been warned in advance by telephone}, ②had done the shopping for dinner ③{[and] cleaned the room} ④{in readiness for Fuyuko's homecoming}.

①{晩夏の夜空はいちめんの星明かり[で]}, ②{空気に強い草の香がまじった}. ③{広場の奥は雑草が群が[り]}, ④{しきりに地虫の声が沸いている}. (伊藤桂一『水と微風の世界』)

①{The late-summer night sky was suffused with starlight} ②{[and] a strong fragrance of grass mingled in the air}. ③{The far side of the open space was crowded with weeds}, ④{[from which] arose a steady chirruping of insects}.

上の例で見る通り、翻訳者が異言語の{単位情報(イメージ・概念)}と{単位情報(イメージ・概念)}の関係を把握して、同じ関係を母語の[関係性指標]および[修辭的工夫]で表すと、異言語の情報を情報順にほぼ等価の母語に変換して伝えることができます。その際に、母語の[関係性指標]や[修辭的工夫]でどのように対応するか、その巧拙が翻訳の品質を決めることになるのではないかと思います。

ただ、{単位情報}順の翻訳を阻む要素がいくつかあります。そこで、ここでは、両言語の固有性を詳らかにして、適正で可能な等価的な対応を検討したいと思います。

2. まず「伝達の嗜好」の違い

たとえば、普通、日本人は次のような言い方をします。

「言語には、情報の嗜好や文素配列などそれぞれ固有性がある。」

しかし、英文の言い方の影響を受けた人は、同じことを

「言語には、それぞれ固有性がある、情報の嗜好や文素配列などが異なる。」

と言うでしょう。日本語は「文素配列」や「情報配列」が緩やかであり、寛容度が高いのか、柔軟性に富んでいるのか、いつの間にか、英語の伝達嗜好も受け入れています。しかし、日本語では、無意識に「個別・具象」から入って「包括・抽象」して伝えるのが普通です。たとえば、

①{子供は犬[とか], 猫[とか], 汽車[とか], 自動車[とか]}
【個別・具象】+②{(動く)ものが好きだ}【包括】。

①{英語を勉強する[ために]}【個別・具象】+②{彼はロンドンへ行った}【包括】。

のように。それに対して、英語では、包括・抽象を優先させ個別・具象を後回しにするという習慣がしっかり守られる傾向があります。たとえば、上の日本語と同じ情報を英語で伝えると

②{Children like moving things}【包括】+①{like dogs, cats, trains, and cars.}【個別・具象】

(子供は動くものが好きだ、犬とか、猫とか、汽車とか、自動車とか)

②{He went to Londo}【包括】+①{to study English}【個別・具象】。

(彼はロンドンへ行ったが、それは英語を勉強するためだ)

のようになります。

翻訳というのは、「イメージ・概念」(単位情報)の出現順序を可能な限り守りながら等価変換することですが、このような「伝達の嗜好の違い」を超えることは出来ないのではないかと思います。日本語の情報順に合わせて

①{Children like dogs, cars, trains, and cars}. ②{They like moving things}.

①{Having an intention of studying English}, ②{he went to London}.

とするのは、正しい翻訳ではないでしょう。このような「伝達の嗜好」は認めざるを得ない言語習慣で、情報順の翻訳を阻む要素の一つです。

3. 「情報素配列」の違い

{単位情報}内の情報素配列は言語の固有性の最たるもので、この配列を壊すと、文素配列がかなり自由な日本語でも情報にならなくなります。特に文素配列を重視する英語では情報にならなくなる場合が生じます。したがって、言語間の変換ではこれを最小単位とせざるを得ないのですが、情報素には主語(N)と述語(動詞, 補語, 目的語)(V(+n))の他に、時(whn), 場所(whr), 様態(hw)などが必須です。これらを加えた単位情報の内部の「情報素配列」も情報順に等価変換できない「固有性」の一つです。たとえば、

A①{彼はまた来る[と]約束し[て]}②{帰った}.

は、単位情報順に

①{He promised [to come] again} ②{[as] he left}.

と変換することができます。

この日本語の「{約束し[て]}{帰った}」という二つの動詞の組み合わせは「同時・順次」を表しているのですが、「{約束し[て]}{帰った}」に含まれている「時」情報を{帰り際に}(これは「単位情報(帰る)+体言(際・時)+に」の修辭的簡略化です)と言い換えて表層に出すと、日本語では

B①{(帰り)}[際]に}, ②{彼はまた来る[と]約束した}

と、「時情報」を前に出すことになります。日本語では情報の了解[既知]・未了解[未知]を情報素配列で区別することはありません。しかし、英語では情報の了解[既知]・未了解[未知]を区別して、「未了解[未知]の時」は述語動詞の後に置くという固有性があります。したがって、前後に文脈情報のない上のような日本語に相当する英文は

②{He promised [to come] again}

+

①{just [as] he was leaving}.

①{just [before] he left}.

が適正ということになります。日本語の情報順に合わせて

①{just [as] he was leaving},

①{just [before] he left},

+

②{He promised [to come] again}

と、「時」情報を前に出すことは、文法的には可能ですが、情報的には適正とは言えないのです。このような「情報素配列の違い」も翻訳の前に立ちはだかる壁です。

一般に、日本語の「情報素配列」は、基本的には、一つです

日1. (時)(+場)(+主)(+動(+目的語)・状(+補語))

①{昨日は六件も火災が発生[し]}, ②{消防隊員は大忙しだった}.

①{この公園には子供用のプールがあつ[て]}, ②{冬にはスケート場になります}.

これに対して、英語には基本的な「情報素配列」が二つあります。

英1 S+【V】(+whr)(+hw)(+whn)

①{Six fires broke out yesterday} ②{[and] the fire brigades were kept very busy}.

①{There is a children's swimming pool in this park}, ②{[and] it is used as a skating rink in winter}.

英2: (whn+)(whr+)S+【V】(+hw)

①{Yesterday six fires broke out} ②{[and] the fire brigades were kept very busy}.

①{There is a children's swimming pool in this park}, ②{[and] in winter it is used as a skating rink}.

①{In this park there is a children's swimming pool}, ②{[which] is used as a skating rink in winter}.

(日本語の情報素配列の(+時), (+場), (+主), (+動・状), および、英語の情報素配列の(+whr), (+hw), (+whn) などが、カッコで括弧であるのは、必ずしもこれらがすべて使われるわけではないことと、場合によっては位置が変わることがあるということを意味しています。)

英語では「英1」が基本ですが、たとえば、お伽噺形式の場合とか、「時」に比重を置く場合や「関係性指標」でやむを得ない場合などでは「英2」が使われ、日本語と同じように「時の表現(+whn)」や、「場の表現(+whr)」が前に置かれます。

Once there lived an old man and his wife.

昔、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

Yesterday when I was young, the taste of life was sweet as rain upon my tongue. (Aznable)

昨日僕は若くて、人生は甘く、舌の上の雨粒のようだった。

On a small island, near a large harbor, there once lived a fisherman's little daughter (named Samantha, but always called Sam),... (Eveline Ness: Sam, Bangs & Moonshine)
小さな島が大きな港の近くにあつて、そこに漁師の小さな娘がいました、名前はサマンサ、でも、いつもサムと呼ばれていました、...

とは言っても、情報素配列はかなりしっかり定型化された言語習慣で、たとえば、{[時・前後の関係性指標]+単位情報}(普通の英文法では「副詞節と言われるものです」で示される場合にも「英1」の情報素配列は守られます。(したがって、情報順の翻訳ができなくなります。)たとえば、

①{ロングドレスを着る[と]}, ②{彼女はぐつとしとやかだ}.

②{She looks very graceful} ①{[when] she wears a long

dress}.

cf. ①{[When] she wears a long dress}, ②{she looks very graceful}.

①{ロンドンを発つ[前に]}, ②{僕は英大博物館へ行きました}.

②{I visited the British Museum} ②{[before] I left London}.

cf. ①{[Before] I left [leaving] London}, ②{I visited the British Museum}.

cf.で示したように、「情報の比重」を無視すれば、日本語と同じ情報順を守ることができるのですが、情報の比重を重視すると、「ロングドレスを着るとも」「ロンドンを立つ前に」も了解情報になってしまうので、前後に既知情報になる文脈がない場合には、必ずしも適正な翻訳とは言えません。

なお、時や前後関係が{[関係性指標]+単位情報}(節 clause)で表される場合、文全体は「複{単位情報}文」になります。これは次の項目とも関係してきます。

4. 「複{単位情報}文」について

言語情報を{単位情報}と[関係性指標]という観点から見ると、日本語で複数の{単位情報}を使って情報伝達する場合、情報伝達の様態はだいたい次のようになります。ここでは、それに等価変換的に英語の情報伝達の様態を当てて、情報順に翻訳する際の問題点を探ります。

イ. ●{単位情報}+{単位情報}+{単位情報}+{単位情報}+...

{単位情報情報(イメージ・概念)}が複数ある場合、もっとも簡単な伝達様態は{単位情報(N+V(+n))}を時系列的に次々に提示することです。

①{僕は朝六時に起きました}. ②{歯を磨きました}. ③{顔を洗いました}. ④{七時に朝ご飯を食べました}.

①{I woke up this morning at six}. ②{I brushed my teeth}. ③{I washed my face}. ④{I ate breakfast at seven}.

①{I got up at six in the morning}. ②{I cleaned my teeth}. ③{I washed my face}. ④{I had breakfast at seven}.

このように時系列的に提示された複数の{単位情報}の場合は、{単位情報}の順に英語に等価変換することができます。

ロ. ■{単位情報}+[関係性指標](同時・順次・反意・選択, など)+{単位情報}

複数の情報を伝える場合、日本語では[そして、それから、

しかし、あるいは]のような[関係性指標]を加えて{単位情報}をまとめることがあります。

①{僕は朝六時に起きました}. ②{歯を磨きました}, ③{それから・そして}顔を洗いました}, ④{七時に朝ご飯を食べました}.

①{I woke up this morning at six}. ②{I brushed my teeth}. ③{I [then] washed my face}. ④{I ate breakfast at seven}.

①{I got up at six in the morning}. ②{I cleaned my teeth} ③{[and] I washed my face}. ④{I had breakfast at seven}.

この場合には、英語でも、対応する[関係性指標](あるいは、[修辭的工夫])を使えば、情報順に等価変換することができます。(なお、上に示したような文は、普通の文法では、「重文」と言われるのです。)

ハ. □{単位情報+[修辭的工夫(が、(し)て、で、など)}+{単位情報}

情報を整理して纏めて伝える場合、日本語では、「磨[き]」「洗っ[て]」のように文尾に[修辭的工夫]をしたり、「[て](修辭的工夫)+[から](関係性指標)」のように、[関係性指標]を加えたりして{単位情報}をまとめることがあります。

①{僕は朝六時に起きました}. ②{歯を磨[き]}, ③{顔を洗っ[て][から]}, ④{七時に朝ご飯を食べました}.

①{I woke up this morning at six}. ②{[After] I brushed my teeth} ③{[and] washed my face}, ④{I ate breakfast at seven}.

①{I got up at six in the morning}. ②{I cleaned my teeth} ③{[and] washed my face} ④{[before] having breakfast at seven}.

①{I got up at six in the morning}. ②{I cleaned my teeth} ③{[and] washed my face}. ④{[Then] I had breakfast at seven}.

このような日本文には[関係性指標](順接(and)・逆接(but)・選択(or)・順次(and)・同時(when)・前(before)・後(after)・因(because)・果(so)・同格(that)・条件(if)・比較(than))や[修辭的工夫](準動詞(ing, -ed, to-Inf.) 前置詞句(with..., on..., in..., by...), など)で対応することによって情報順の等価変換ができますが、その場合、「情報の比重」と「関係の緊密性」に配慮しなければなりません、たとえば、

上の例で言うと、日本語の「修辭的工夫[て]+關係性指標[から]」という組み合わせを英語で [After] にするか [before] にするかは、「after=から」「before=前に」という表層的な対応ではなく、「情報の比重」をどのようにとらえるかに関わりますし、また、それらではなく [Then] にするかどうかは{単位情報}間の「關係の緊密性」をどのようにとらえるかと関係しています。

つまり、日本語には、複数の{単位情報}のつなぎ方は

J{単位情報}+[(修辭的工夫)(+關係性指標)]+{単位情報}

という一つの表現様態しかないのですが、英語には「情報の比重」によって、

E1{単位情報(未了解情報)}+[{關係性指標]+単位情報(未了解情報)}

E2[{關係性指標]+単位情報(了解情報)}+{単位情報(未了解情報)}

という二つの表現様態があるので、どちらで対応するかは、構造上に現れていない日本語の情報の比重を斟酌しなければならないということです。日本語の場合、情報が未了解・未知か了解・既知かは情報配置では決まらないのですが、英語の場合は、その情報が未了解・未知情報か了解・既知情報かによって情報配置が決まるということです。その上、E1、E2において、日本文に対応してどのような[關係性指標]を使うか、どのように[修辭的工夫]をするかは、日本文の「前の単位情報」と「後の単位情報」との「關係性・緊密度」によって決まるのです。ただし、逆に、これらの点を無視するなら、ここで挙げた「複{単位情報}文」は(工夫すればほぼ)情報順に等価変換することができます。ただし、「修辭的工夫[・・・して・・・]」の中には、情報順に変換することができないものがあります。たとえば、

①{彼は帽子をとつ[て]}②{僕に挨拶した}。

は、帽子をとって「こんにちは」と言ったのなら、

①{He took off his hat} ②{[and] greeted me}。

ですが、帽子をとって会釈したのなら

②{He greeted me} ①{[[by removing [taking off]] his hat}。

です。「・・・することが・・・なる」という意味合いを含む[して]は、情報順に翻訳できません。

①{彼は草を食べ[て]}②{命をつないだ}。

②{He survived} ①{[by eating] grass}。

①{両親は田舎に住んでい[て]}、②{{牛を飼つ[て]}③{生活しています}。

①{My parents live in the country} ③{[and] they make their living} ②{[by raising] cattle}。

二. ◆{連体節+体言}+・・・

情報順の翻訳を阻む最もやっかいなものとして、日本語には、「連体節+体言」という独特な表現様態があります。この様態は、翻訳の観点から、いくつかのタイプに分けることができそうです。

【二. 一1】

最も情報順の翻訳ができないのは、組み替えると一つの{単位情報}になる「連体節+体言」で、英語では、基本的には、{先行詞(名詞・代名詞)+關係詞節}で対応せざるをえないものです。たとえば、

{[そして]七時に{(姉さんが作ってくれた)朝ご飯}を食べました}。

{[and] I ate {breakfast (that my sister made for me)} at seven}。

{[Then] I had {breakfast (that my sister prepared for me)} at seven}。

のように、このタイプは組み替えると「姉さんが[は]朝ご飯を作ってくれた」(my sister made [prepared] breakfast for me)となつて、「連体節+体言」が一つの{単位情報}ととらえて翻訳するしかないように思われるものです。

{{(宿にした)ホテル}はこじんまりとしている[が]}、{{(ドイツ的な清潔感に溢れた)ホテル}であつた}。

{{The hotel (I stayed at), {[though] modest(in scale)}, exuded [had] a typically German sense of cleanliness},

{スタンドでウィスキーを飲んでいる[と]}、{{(見覚えのある)ホステス}が傍の椅子に腰かけた}。

{I was drinking (a) whisky at the bar}(,){[when] {a hostess (I remembered from before)} seated herself next to me}。

なお、次の例では述語が知覚動詞であるため、「名詞+關係詞節」ではないように見えますが、根は同じです。

{子供のころ, {新聞を声を出して読んでいる老人}を見かけたものだ}.

{[When] I was a boy}, {you would sometimes see {an elderly person reading a newspaper aloud to himself}}.

{[Whe]n I was a child}, {I used sometimes to see {an old man reading a newspaper aloud to himself}}.

{入江にはヨットや{日光浴を楽しむ家族連れ}の姿が見られた}.

{There were yachts in the inlets of the harbor}, {[and] families could be seen sunning themselves}.

【二. 一2】

「連体節＋体言」で組み替えると{単位情報}になるタイプでも、体言(名詞・代名詞)が固有名詞とか人称代名詞とか「唯一無二」である場合には、「固有名詞・人称代名詞＋関係代名詞節」で変換すると、本来は「唯一無二の人・もの・こと」が、同時に二つ(以上)存在することになるという矛盾が生じるので、別の対応をしなければなりません。そのような矛盾が生じないように、とは、言い換えると、新しいカテゴリーを作ることにならないように変換処理をする必要があるということになります。

{{(朝六時に起きた)僕}は歯を磨[き]}{顔を洗[い]},
{[そして]七時に{(姉さんが作ってくれた)朝ご飯}を食べました}.

{[Upon] waking up at six this morning}, {I brushed my teeth}, {washed my face} {[and] ate {breakfast (that my sister made for me)} at seven}.

{Getting up at six in the morning}, {I cleaned my teeth} {[and] washed my face}. {[Then] I had {breakfast (that my sister prepared for me)} at seven.

翻訳の観点から見ると、「{(朝六時に起きた)僕}は・・・」は「朝六時に起きて僕は・・・」を背景に持っていると考えることができるので、このタイプの「連体節＋体言(固有名詞・人称代名詞)」は「分詞構文」や「コンマ＋関係詞」などを使えばほぼ情報順に処理することができるということです。いくつか例を出しておきます。

{{(日中人々と華やかな装いであふれた)公園通り}は、まだ朝もやの中に静まり返っていた}.

Koen-dori, which in the middle of the day overflows with people and colorful shop fronts, lay silent, still wrapped in a morning haze.

{{(タクシーを拾おうとする)梶村}に、国見は「{ちよっと待ってくれ}. {おれは古賀さんに電話したい[から]}」と言った}.

Kajimura was about to hail a taxi when Kunimi said, “Wait a moment. I want to phone Mr. Koga.”

「和人」

軽く肩を叩かれてふり向くと、高校時代に親しく付き合っていた神山が日焼けした顔で微笑していた。

“Kazuto.”

(There was)A light tap on his shoulder, and he looked round to see Kamiyama, a close friend of his at high school, standing there with a smile on his sunburnt face.

萩原君一。

海外から帰ってきた島専務に、いきなり呼ばれた。

“Hagiwara---.”

The abrupt summons came from Mr. Shima, the firm's managing director and only just back from overseas.

{{(国際人になる)}ということが{(どんなに大変な)こと}か、
{{(三年ばかりニューヨークに暮らした)私}にはよくわかる}.

Having once lived for three years or so in New York, I know very well how difficult it is to become an “internationally minded person.”

{{(1949年に二度目の渡仏をした)藤田嗣治}は、その年のうちに、{(レストランにひとりで座っている)女性}を描いた。
◇{(パリの街に着いたばかり)の者}には{(目につきやすい)光景}なのかも知れない}.

Visiting France for the second time in 1949, Fujita Tsuguharu, within the same year, painted a picture of a woman sitting alone in a restaurant.. It's the kind of scene, perhaps, that catches the eye of someone newly arrived in Paris.

In 1949, on his second visit to France, Fujita Tsuguharu painted within the same year a picture of a woman sitting (at a table) alone in a restaurant. Such a scene may be particular eye-catching for anybody who just arrived in Paris.

また、「新しいカテゴリーを作らないように」という意味では、体言が普通の名詞でも同様の処理をしなければならない場合があります。体言が「普通の名詞」の場合の例も出しておきましょう。

丘や森がするするすべっていく。雪に覆われた丘は、腹を銀や白や灰色に光らせ牧場らしい木柵に区切られながら、まるで呼吸でもするように膨れたり萎んだりしていた。

Uplands and forest were slipping past outside. Snow-covered, the uplands glittered silver, white and

grey on their flanks, divided up by wooden fences suggesting pastures: they swelled and shrank, for all the world as though alive and breathing.

「(雪に覆われた)丘」は、「いま見ているその丘は雪に覆われていて、それらは・・・」(The uplands were covered with snow and they...) という情報を日本語では簡潔にまとめて「連体節(雪に覆われた)＋不定代名詞的名詞(丘)」で表していると考えられます。一時性を表す「連体節＋体言」は、「名詞＋関係詞節」で対応するのではなく、分詞構文を使いう手があります。つまり、The uplands were covered with snow and they... を分詞構文にして Snow-covered, the uplands... とするのです。これは、「連体節＋固有名詞」、たとえば、「日露戦争に勝った日本は・・・」を翻訳する際に Having won the war against Russia, Japan... とするのと同じです。一般に、「連体節＋固有名詞・人称代名詞」は「コンマ＋関係詞節」か「分詞構文」を使うことになります。その意味で、日本語の修飾語の位置とは合いませんが、The uplands, covered with snow, ... も英語としては可能です。ついでながら、「雪に覆われた丘」を the snow-covered uplands とすると、厳密に言うと、これは「(もともと雪に覆われた丘があつて)その丘は・・・」の意味になってしまうのです。

日本語には「冠詞」がないので、「(朝六時に起きた)僕は・・・」(カテゴリー化)と「朝六時に起きて、僕は・・・」(非カテゴリー化)の違いはほとんど意識されません。「限定修飾語」も無意識に尽かされます。次はその例です。

黒い木々はクリスマスツリーそっくりに雪をのせ一つ一つの木が大きくて何だか怒っているみたいに時々身震いしては、粉袋をぶちまけたような雪の塊を落した。

The trees, black and topped with snow like Christmas trees, were big and from time to time with an angry-looking shudder, they would let fall a lump of snow like someone emptying a bag of flour.

「黒い木々」は、一見「黒い」という形容詞一語で修飾されているように見えますが、「平常的に黒い木」があるわけではなく、「連体節(黒い→黒く見える)＋体言(木々)」ということを伝えたいのですから。厳密には The black trees ではなく、the trees, (which were) black)(>the trees were black and they...)で対応しなければなりません。

【二. 一3】

「{連体節}＋体言」の中には、「連体節＋体言」の体言が全体の文素にはなっていない、連体節の中では文素になっていない場合があります。これは「イメージ＋間(ま)＋イメージ」の俳句の手法(切れ)と似ています。

{台所には{卵を焼いた}匂いが立ちこめていました}。
{The smell of {fried eggs} filled the kitchen}。
{There was a smell of {fried eggs} in the kitchen}。

このタイプの「{連体節}＋体言」を「先行詞(名詞・代名詞)＋関係詞節」で対応して、

*The smell of{ eggs (that were fried)} filled the kitchen}。

とすることは文法的には可能ですが、実際には使われない文になってしまいます。「卵を焼いた匂い」は「{(人)が卵を焼いた}がすでに{単位情報}になっているので、「{卵を焼いた}ときの匂い」→「{卵焼き}の匂い」と変えて対応せざるをえません。

部屋はアップルパイを焼くにおいが充満していた。

The whole room was filled with the smell of apple pie baking.

cf.「この部屋、なんだかいいにおいがするね」「今朝まで活けておいた水仙のにおいね、きつと」

“There seems to be some sort of pleasant fragrance in this room.” “It must be the fragrance of daffodils that were in here till this morning.”

「連体節＋体言」に関しては、他に、

ホ. □{単位情報}＋関係性指標語(時・前・後・ので・ながら、こと、など)(＋助詞))

これは「僕が事務所に着いた(連体節)＋時(体言)＋(に・には)」とか「朝ご飯を食べ(連用節)＋ながら」とかの場合で、連体節(や連用節)が{単位情報}として完結しているので、英語では、後に続く「(＋助詞)」と合わせて「{[関係性指標]＋{単位情報}}」で対応することができます。

{朝ご飯を食べ[ながら]}, {僕は姉さんに{(昨日学校で起こった)こと}を話しました}。

{[While] having breakfast}, {I told my sister {what happened at school yesterday}}。

ヘ. □{簡略化単位情報}(＋の)＋体言(＋助詞))

基本的には「[関係性指標(同時・前・後・因果・同格・条件、など)]＋{単位情報}」で対応処理して、普通の文法で言う「従属節」としたり、「{前置詞＋名詞}」で処理したりすることができます。

{帰り際に(<(帰る)＋際・時＋に)}, {彼はまた来る[と]約束した}

{He promised [to come] again} {just [as] he was leaving}.
{just [before] he left}.

{{子供}のころ}, {私は妹とよくあの川に釣に行ったもので
す}.

{I would often go fishing in that river with my sister}
{[when] I was a child}.
{as a child}
{in my childhood}

「リセにはいらたての頃、友達と川の二キロ上流から岸づた
いに、この町まで歩いたことがあったわ。」青信号で橋を渡る
とき、運転席のシモーヌが言った。

“Once, just after I (had) started at the Lycee.” said
Simonne as the light turned green and she drove us across
the bridge, “I walked with a friend along this bank from (a
point) two kilometers upstream as far as the town.”

などがありますが、「連体節＋体言」という日本語の表現様
態のうち、イ. ロ. ハ. と ホ. ヘ. は何とか情報順に訳すこと
ができます。二. は、体言を中心にイメージの塊を作る日本
人の嗜好に合った日本語独特の表現様態です。これは情
報順に翻訳することができないという点で、日本語の固有性
といえます。しかし、情報順に翻訳できない、この
表現様態がないと、日本語の特色はほとんど失われてしま
うと言ってもいいでしょう。たとえば、

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞くとときぞ秋はかなしき
(二.)

Treading through the crimson leaves in the forest depths, a
wandering stag calls for a mate. When I hear the cry, I
feels the autumn lonely.

冬の日や馬上に氷る影法師(芭蕉)(二.)

The winter's sun--a frozen shadow--on horseback.

ゆるやかに着てひとと逢う蛍の夜(桂 信子)(ホ.)

Wearing a kimono loosely, I'm awaiting his arrival--in a
night of fireflies.

のような、歌や句はなくなってしまいます。

この表現形態に関しては、先人たちの業績も踏まえた高
橋雄一の『日本語における連体節の研究』(東京外国語大
学に 2006/04/25 に提出された博士学位論文)が包括的で
詳しく、また、翻訳を視野に入れた著作では、佐良木昌編
著『言語過程説の探求 第三巻 自然言語処理の展開』
(2007/09/15 明石書房)の「時枝古典解釈文法から翻訳
過程論への示唆」(佐良木昌)があります。

文 献

岩垣守彦『よい英文を書くための和文英訳のテクニック』(ジ
ャパンタイムズ, 1994)

岩垣守彦「日本文の「つなぎ」と英文の「つなぎ」の対応
に関して」(2003/05/26 自然言語処理研究会, 東京工業大
学)

岩垣守彦「複数の「単位情報」の連結について一言語情
報文法の観点から」(2011/11/26「思考と言語」研究会・早
稲田大学)

岩垣守彦「日英両語における論述様態の対応関係一言
語情報文法の観点から」(2012/06/12 人工知能学会全国
大会・オーガナイズドセッション「ことば工学」(山口)

岩垣守彦「複数の単位情報からなる言語情報の処理に
ついて」(2012/06/23「思考と言語」研究会(早稲田大学)

岩垣守彦「「単位情報」順に処理できない「複数単位情
報文」の変換について」(2012/12/08「思考と言語」研究会
(早大)

岩垣守彦「単位情報順の変換に関わるいくつかの問題
点」LACE(言語・認識・思考)研究会・第18回年次研究会
2013/12/23)(早大)

佐良木昌・宮澤織枝・新田義彦(2007)「シテ形用言連接
句の対訳データ構築と日英機械翻訳の訳質改善」(言語
処理学会第13回全国大会, 2007/03, 龍谷大学)

佐良木昌「古典解釈と自然言語処理—時枝文法におけ
る「条件法として解釈される連体形の一用法」からの示唆」
(「言語・認識・表現」第20回年次研究会, 2016/11/26, 千
代田区図書館研修室)

高橋雄一『日本語における連体節の研究』(東京外国語
大学に 2006/04/25 に提出された博士学位論文)